

西谷遺跡発掘調査報告書

—伝長宗我部氏屋敷跡の調査—



3月 1991年

南国市教育委員会

西谷遺跡発掘調査報告書

——伝長宗我部氏屋敷跡の調査——

3月 1991年

南国市教育委員会

序

南国市は県中央部に位置し、高知県の主要平野である高知平野の大半を占めるなど、地理的にも恵まれた環境を有しております。国分川と物部川の沖積作用によって形成された豊かな沖積平野のもとで、近年までは水稻二期作の中心地として知られ、稲穂のたゆむ田園地帯の広がりは、高知県の豊穣を代表するものがありました。しかし、時代の趨勢のなか、本市におきましても各種開発事業等の急増、市域周辺における宅地化等により、農地の利用転換の波が急激な度合で進み、かつての田園地帯が都市へと変貌を遂げつつあります。またこのような情勢をうけて、都市型機能の整備促進等のニーズも年々高まっており、加えて、本市は県中央部の重要な地域でもあり、新交通体系に基づく道路等交通網の整備などを含む新たな地域活性化が求められていることから、将来を踏まえた基盤整備が現在進められております。

肥沃な平野部をもつ本市は、田村遺跡群、土佐國衙跡、土佐國分寺跡・比江廐寺塔跡などに代表されるが如く、古来、土佐の文化の中心地域であり、県下で最も多くの埋蔵文化財包蔵地が所在しております。このため、急速に進展する開発事業と埋蔵文化財の保護をいかに調整していくかが重要な課題となっており、先人の貴重な文化遺産を継承しつつ、新たな地域創生を図ることが急務となっております。

この度、岡豊城跡の東山裾部に位置する西谷遺跡において、個人の宅地等造成工事に伴う発掘調査が実施され、岡豊城跡に関連する遺構が発見されるなど多大な成果を得ることができました。本書は、調査成果をまとめたものであり学術資料として広く一般に活用されるとともに、文化財の普及啓蒙の一助となれば幸いに存じます。

調査にあたっては、文化庁並びに高知県教育委員会、財團法人高知県文化財団の多大な御協力、御援助をいただいたのをはじめ、地権者並びに地元岡豊地区の皆様方には、深い御理解と御協力をいただきました。発掘調査関係各位の御労苦に深く敬意を表しますとともに、厚く御礼申しあげます。

平成3年3月31日

南国市教育委員会

教育長 栄枝利實

例　　言

1. 本書は、平成2年度国庫補助事業として南国市教育委員会が実施した西谷遺跡（伝長宗我部氏屋敷跡）の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、南国市教育委員会が主体となり高知県教育委員会の指導及び財団法人高知県文化財団の協力を得て実施した。発掘調査は財団法人高知県文化財団調査係長山本哲也、調査員坂本憲昭、曾我貴行が担当し、調査事務は南国市教育委員会社会教育課主幹岡崎聰一が担当した。また、現地調査では小松大洋、出土遺物等の整理については高知県教育委員会文化振興課主事松田直則の協力を得た。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図は国土地理院発行5万分の1（高知）及び2万5千分の1（とさやまだN1-53-28-7-1・高知7号-1）を、第2図は2千5百分の1高知広域都市図No.16及び17を複製使用したものである。方位は第1・2図が方眼北（G・N）で、他は磁北（M・N）によるものである。
4. 出土遺物の実測図は $\frac{1}{10}$ ・ $\frac{1}{20}$ 縮尺を使用した。また造構平面図及び土層断面図は縮尺 $\frac{1}{10}$ による実測図を $\frac{1}{10}$ 又は $\frac{1}{20}$ に縮尺して使用した。
5. 本書の編集は南国市教育委員会が行い、執筆はI・IIを坂本憲昭が、V3を松田直則が、他は山本哲也が担当した。
6. 調査にあたっては、地権者今井保夫をはじめ地元八幡地区の皆様方、岡豊小学校及び岡豊保育園の関係者各位からは多人な御協力と御援助をいただいた。ここに改めて厚くお礼申し上げたい。（敬称略）

本文目次

I 遺跡の沿革	1
II 調査に至る経緯と経過	3
III 調査の概要	5
IV 主要遺構及び遺物	6
V まとめ	18

挿図目次

- Fig 1 遺跡の位置
- Fig 2 調査の位置図
- Fig 3 検出遺構図
- Fig 4 土層及び遺構断面図
- Fig 5 出土遺物実測図
- Fig 6 出土遺物実測図
- Fig 7 出土遺物実測図

図版目次

- P L 1 調査地遠景 (矢印調査地・右子は岡豊山 北東から)
同 上 (手前谷入口部・奥調査地 東から)
- P L 2 調査前近景 (北東から)
同 上 (東から)
- P L 3 伐採風景 (南から)
同 上
- P L 4 トレンチ設定状況 (南から)
同 上
- P L 5 S D 1, 2 検出状態 (北から)
礎石検出状態 (南から)
- P L 6 古銭 (祥符通宝) 出土状態 (北から)
S D 2 遺物出土状態 (北から)
- P L 7 調査区北東部トレンチ完掘状態 (南から)
S D 1, 2 周辺 (南から)
- P L 8 調査区北東部遺構検出状態 (北東から)
S D 4, 5・S K 1～3 周辺 (南西から)
- P L 9 S D 1～5 周辺 (南から)
S D 2 南側礎石検出状態 (南から)
- P L 10 調査区東側遺構検出状態 (南西から)
調査区遺構検出状態 (北から)
- P L 11 出土遺物
タ
- P L 12 タ
タ
- P L 13 タ
タ
- P L 14 タ
タ

I 遺跡の沿革

岡豊城跡がある岡豊山は、南国市街の北西に位置する独立丘陵である。南には国分川が流れ、山上からは高知平野の中央部を見渡すことができる。

岡豊城跡は、昭和30年に県指定の史跡に指定されており、戦国時代四国を平定した長宗我部元親の居城であるとともに、高知県下の中世城跡としては、遺構の保存度も良好な城跡であるとして知られる。岡豊城跡に現在残る遺構は、詰の段を中心に二の段・三の段・四の段等の曲輪が残し、詰の南西標高約69mの所には、廻路曲輪と伝えられる支郭もあり、昭和45年に南国市指定の史跡になっている。また詰より南下した尾根の先端（標高38m）には、家老屋敷と伝えられる分離郭が残る。

岡豊城跡主郭部については、高知県による歴史公園としての整備計画に伴い、昭和60年度より5ヶ年計画による発掘調査を高知県教育委員会が国庫補助を得て行った。引きつづき平成2年度には、継続調査が行われ、主郭部には、礎石建物、石塁内側階段状造構等これまで岡豊城跡においては確認されていなかった新たな遺構の存在が明らかになるなど多大な成果を得ることができた。

城主長宗我部氏は、その系図によれば^(註1)、秦氏の後裔といわれているが、諸説がある。土佐には、平安末から鎌倉初期に入国していたと考えられている。その後室町時代には、土佐国守護細川氏の傘下に入り、吸江庵寺奉行を勤めるなど実力をつけてゆく。しかし、室町時代末には幕府の権力は衰退し、守護領国制の変化がおこる。土佐においても例外でなく、細川氏の勢力は衰亡し土佐も戦国時代へと入ってゆく。その中で、長宗我部氏は、本山氏、吉良氏などの在地勢力によって、居城である岡豊城を攻められ永正5年（1508）城主兼序は自刃し城は落城したと伝えられている。^(註2)嗣子千雄丸（成人後國親・元親父）は、かろうじて落ちのび中村的一条氏を頼る。そして、成人するに及び、岡豊城へ戻ることがかない、戦国大名として実力をつけてゆく。元親の時代には、土佐平定・四国統一と順調に成長し戦国時代有数の大名となるが天正13年（1585）豊臣秀吉の四国征討によって土佐一国の領有が確定する。その間元親は領国経営にも努め、「長宗我部百箇条綱」を定め、検地を行った。また、城下町を岡豊城東側に建設するなどする。天正16年（1588）には、居城を大高坂の地に移し、岡豊城は、その長宗我部氏の居城としての役割を終える。以上が長宗我部氏と岡豊城跡の沿革である。

註1 「皆山集」所収系図など伝来系図は多い。

註2 「上佐物語」より

参考文献 山本大「第四編中世」『南国市史』昭和54年 南国市

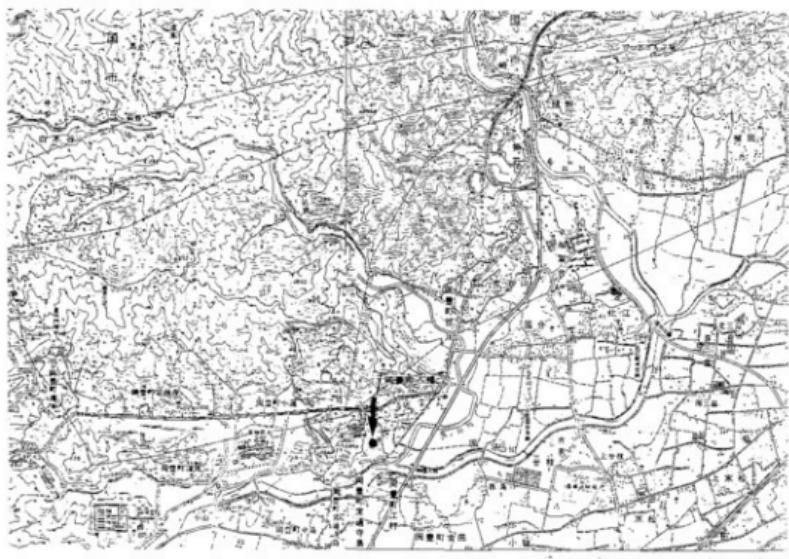
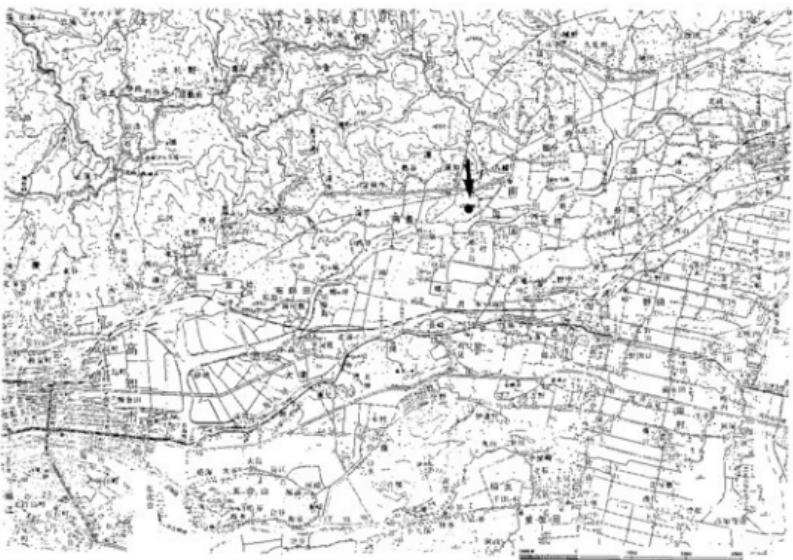


Fig. 1 遺跡の位置

II 調査に至る経緯と経過

今回調査が行われた西谷遺跡は、南国市岡豊町八幡字西谷にあり、岡豊城跡のある岡豊山の東山麓にあたる。この、岡豊城跡と西谷遺跡については、密接な関係にあり、不可分のものと考えてもよい。

岡豊城跡については、戦国時代に土佐を統一し、四国を平定した長宗我部氏の居城として著名である。

西谷遺跡は、この長宗我部氏の居館跡として、地元に伝えられるものの一つである。長宗我部氏の居館については、史料の語るものもなく、現在まで、その具体的な場所及び規模などはまったく不明で、岡豊山上の郭にあったとする説や、山下に居館があったとする山下居館説などある。

岡豊城跡については、昭和60年度から主郭部の発掘調査が5ヶ年をかけ、高知県教育委員会によって行われた。この調査の結果、礎石建物跡等が検出された。しかし、居館であったと特定できる建物跡等はなく、山上居館説についての裏付けを得ることはできなかった。

山下については、これまで、調査が行われたことがなかった。しかし、一般的に、戦国時代における城主の居館は山下にあり、これを中核に家臣屋敷群・寺社・市町等から城下町を形成すると言われている。岡豊城跡においても、岡豊山麓の東側に「新市町」と呼ばれる城下町が形成されていたことが『江村地検帳』の記述から明らかになっており、岡豊山東山麓に居館があったと推定でき得る材料になっている。また、『長宗我部地検帳』の記述からも、これは裏づける事ができる。これらの事からも、今回岡豊山東山麓にある、伝長宗我部屋敷跡といわれる西谷遺跡の調査は長宗我部氏の居館の特定に一定の意義を持つものである。

今回の発掘調査は、個人による造成工事計画に先駆つもので、造構等の所在の確認を行い、記録保存措置を講じることを目的とし、南国市教育委員会を主体として調査が行われることになった。調査対象地の現況は、山際をコの字型に切り開いた平坦地で約800m²の面積があり、東側に向って視界が開けていた。発掘区は当初西側山際横にトレンチを入れ、造構等の検出に伴い隨時拡張していった。発掘面積は約440m²で、調査期間は平成2年12月10日から平成3年2月26日までであった。なお、調査終了後に遺物等の整理作業を実施した。



Fig. 2 調査区位置図

III 調査の概要

西谷遺跡は、平成元年度南国市内遺跡分布調査によって再確認された中世遺物散布地で、南国市岡豊町字西谷に所在し、岡豊山の丘陵東側山裾部に位置している。遺跡は岡豊城跡が築かれた丘陵の山際に立地し、周辺の現況は山林、畑地、学校等敷地となっている。調査対象地は遺跡南西部分に該当し、匁字型に東に開口した谷地形の奥部である。調査地は、標高19m前後を測るテラス状の平坦地形で調査前は荒蕪地となっていた。谷地形の奥部には、山裾部に石垣組みの溝が、段状部には石垣の構築がみられ、意図的に丘陵西側斜面を開墾し平坦地形とした痕跡が観察される。岡豊城跡の隣接地であり、山裾部の畠地等から中世土器片が採集されること、また周辺は「長宗我部地検帳」による長宗我部氏屋敷跡の伝承地となっていることなどから、岡豊城跡の付属部もしくは城主屋敷跡の一画として利用されていた可能性を有し、遺構等の所在が想定されていた。

調査は、立木等の伐採除去後、平坦地形西側の山裾部に南北方向からトレーニング（幅2m長さ20m）を設定し、遺構等の確認作業を行った結果、石組みの排水溝（SD2）が検出され、中世の土師質土器片が出土したことから、調査区を西側及び東側へ拡幅し、遺構検出を行った。また、発掘区中央部及び北東部で土層堆積状態確認のための試掘区を設けた。なお、測量作業は発掘区にX100.00m Y100.00mを基準とする任意座標を設定し、遺構平面図等を作成した。水準測量点は、道路等の境界杭を利用して国道32号線北側の一等水準点（26.30M）から索引し、調査対象地東側の境界杭を標高18.083mとした。

発掘区の基本層序は、第Ⅰ層表土で暗褐色腐殖土・第Ⅱ層茶褐色粘礫土・Ⅲ層黃茶褐色粘礫土・第Ⅳ層黃褐色粘礫土・第Ⅴ層灰茶色粘礫土・第Ⅵ層茶灰色粘礫土・第Ⅶ層暗灰茶色粘質土・第Ⅷ層蛇紋岩風化土層（岩盤）である。このうち、第Ⅰ層・第Ⅱ層上部からは近世陶磁器片・瓦片・土師質土器片が、また第Ⅲ～第Ⅴ層上部では土師質土器片・青磁・白磁・染付・瓦片・鉄釘等が出土した。発掘区の中央部より西側では、第Ⅸ層上に第Ⅰ・Ⅱ層・褐色粘礫土・暗褐色粘礫土が堆積し、東側では第Ⅲ～第Ⅶ層・茶褐色粘土が堆積していた。第Ⅸ層は、発掘区の中央部から東側にかけて緩やかに傾斜する基盤土である。第Ⅲ・Ⅳ層は土層堆積状態から、人為的な整地土とみられるが、第Ⅴ～Ⅷ層は谷斜面部に堆積した自然堆積土であると判断される。また、発掘区西側では第Ⅸ層が南北方向にかけて整形され暗褐色粘礫土（蛇紋岩風化土・ダケ土で中世土器片混入）が堆積し、SD2が構築されていた。なお、発掘区北西隅では第Ⅸ層上に褐色粘礫土が堆積し、弥生土器片（甕、中期後半～末、龍河洞式併行）が出土した。

発掘区からは溝・礎石・ピット・土壤等を検出し、中近世土器片等が出土したことから、岡豊城跡関連遺構が所在していたことが明瞭となった。

IV 主要遺構及び遺物

1 遺構

溝5条、土壙3基、礎石、ピット等が検出された。検出遺構は、第Ⅱ・Ⅲ層及び第Ⅶ層上面で確認された。概要は以下のとおりである。

S D 1

調査区西端で検出された南北方向の溝である。幅0.35~0.5m、深さ36~42cm、検出長22.8mを測る。岩盤（蛇紋岩）掘削により整形されており、検出範囲中央部では東側に石列を伴う。埋土は褐色粘礫土であるが、調査区南西部では暗茶褐色粘質土が堆積していた。S D 1南側は石列の構築状況が異なり、礎石の転用石とみられるものが石列中に含まれるなど、堆積土及び遺構検出状態からみて二次的な改変をうけたものと判断される。暗茶褐色粘質土中からは、近現代陶磁器片が出土しており、開墾等に伴う排水溝を設けるために新たに手直しされたとみられる。S D 1からの出土遺物は、褐色粘礫土中から少量の土師質土器片が得られただけで、形成時期を探る資料に乏しい。また、S D 1南側では近現代の二次的な改変と判断される部分も存在し、検出長全体を当初からの遺構として把えることは判然としない。しかし、調査区中央部から北側にかけては岩盤をU字型に掘削し、中央部では岩盤（第Ⅶ層）上に布敷した整地上に石列を設けており、整地土（暗褐色粘土）中から中世土器片が出土していることからもS D 2と共に形成された戦国時代期の遺構として把握することが可能である。

S D 2

調査区西側中央部で検出された南北方向の溝である。幅0.36~0.40m、深さ24~48cm、検出長9.4mを測る。溝の両脇は、25cm~40cm大の自然石（砂岩・蛇紋岩等）による石積みが施され、2、3段が遺存していた。溝の埋土は茶褐色粘質土で、埋土中及び溝底面上から土師質土器片が出土した。石組み溝の構築は、上層断面観察の結果から岩盤（第Ⅶ層）を南北8m東西5mの範囲で整形し、浅い皿型の窪地としたうえ、岩盤掘削による排土と考えられる暗褐色粘礫土（蛇紋岩、ダケ土）を布敷して整地し、石列を配して溝としている。また、S D 2西側では、S D 1との間に茶褐色粘土による盛土を行い、段上部を設けている。S D 2の構築状況から、S D 1・2はほぼ同じ時期に形成された遺構である可能性を有する。なお、遺構検出面は本来の遺構形成面の基部とみられ、S D 2東南部でL字型に遺存する石列が所在することからも、S D 2東側に南北8m東西3.2mの範囲で段上部が設けられていたことが推察される。S D 2周辺以外では、U字型に地山整形を施した痕跡は認められないことから、遺構形成期の地業により西側山際部から流入する湧水等を処理し排水機能を高めるために、S D 2周辺が特に入念に整地されたことがうかがわれる。また、S D 2東側では地山（第Ⅶ層）上に礎石が配されており、S D 2南側において東西棟の礎石建物址が所在していた可能性が強い。S D 2はS D 1に南北方向に平行する石組み溝であり、S D 1・2及びS D 2東側の礎石建物址等は、当初

から一連の機能を有する施設として建設された遺構であることが考えられる。

S D 3

調査区南西部で検出された南北方向の溝で、北端は S D 4 の西端と交差する。幅0.65～1.0m、深さ14～28cm、検出長9.5mを測る。第Ⅳ層上（蛇紋岩風化土）で検出され、埋土は茶褐色粘質土である。S D 4との先後関係は明瞭ではないが、谷部の水を排出するために設けられた「字型」の溝である可能性をもつ。

S D 4

S D 3に直交して設けられた東西方向の溝で、幅0.38～0.5m、深さ14～28cm、検出長12mを測る。西端部では、溝の両肩部に石列が遺存しており、石列によって区画された溝として復元される。S D 4 西部は、地山土である第Ⅳ層を掘削して形成されているが、中央部から東端にかけては、第Ⅳ層上に堆積する明茶褐色粘土（第Ⅳ層類似）を掘り込んで形成されている。埋土は、茶褐色粘質土で、土師質土器片と共に溝埋土上部から近世陶磁器片が出土した。

S D 5

S D 4 北側に形成された「字型」の溝であり、S D 4 西端部から分岐している。幅0.34～0.44m、深さ6～11cm、検出長10.0mを測る。明茶褐色粘土を掘削して形成し、S D 3 と同様、石列を伴う。埋土は茶褐色粘質土で、埋土中及び溝底面上から、青磁・土師質土器片等を出土した。なお、S D 4 東端は南北方向のカク乱土により寸断され不鮮明となっている。

S K 1

調査区北東部で検出された土塙で、長辺1.6m短辺0.98m・深さ17～29cmを測る。第Ⅲ層上面で検出され、埋土は暗茶褐色粘質土である。土塙肩部周囲に幅10cm前後を測る明黄褐色粘土が貼付され漏水処置が施されている。埋土中から近現代陶磁器片・瓦片等が出土した。

S K 2

S K 1 南側で検出された土塙で、長辺1.6m短辺0.8m・深さ38cmを測る。S K 1 と同様、第Ⅲ層を掘削して形成され、埋土は暗茶褐色粘質土である。土塙肩部周囲には明黄褐色粘土が貼付されている。埋土中から近現代陶磁器片・瓦片等が出土した。

S K 3

S K 1 の西側で検出された椭円状の不整形土塙で、長辺0.94m短辺0.8m・深さ25～38cmを測る。埋土は、暗茶褐色粘質土で、炭化物を多く含む。近現代陶磁器片・瓦片が出土した。S K 1・2 と同じく、第Ⅲ層上面で検出された。S K 1・2 は、検出状況からみて、近世以降の耕作用の野臺もしくは野溜と判断される。また、S K 3 は若干様相が異なるものの、S K 1・2 と同様な性格を帯びた耕作用施設とみなされる。S K 1～3 により、近世以降（江戸時代後半以降）においては調査地は耕作地として利用されていたと推定される。

礎石

S D 5 西端部周辺及び S K 2 南東部周辺で検出された。30～50cm大の自然石（砂岩・蛇紋岩）を東西又は南北方向に配するもので、S D 5 周辺部の礎石列は第Ⅳ層（岩盤）上に、また、S

K 2 の礎石列は第Ⅲ層上に裾えられている。前者の礎石列は、柱心間1.5~1.8mを測り東西棟の建物址が所在していたことが推測される。また、後者の礎石列は、柱心間1.8~1.9mを測り東西棟もしくは南北棟方向の建物址が所在していたと判断される。両者の礎石建物址の形成時期・規模・内容等については、礎石間が欠落しておりまた、抜き取り痕等の痕跡も不明確で、明らかではない。ただ、前者の礎石建物址については地山上に形成されているのに対して、後者は整地土とみられる第Ⅲ層上に置かれている。

なお、礎石上面の配置高では両者間に大きな隔りはなく、一見すると全体的に東西棟の建物址が存在していた様相を呈している。仮に両者の礎石列が同一の建物を構成するものと推考すれば、第Ⅲ層を布敷し整地作業を施した後に建築された建物址であるとみられる。

礎石列の検出状況からは、前述した如くその形成時期・内容等を明確にすることは困難である。礎石列の全体像からは、地山上の礎石列が戦国時代の遺構である可能性をもつてのに対して第Ⅲ層上の礎石列からは、第Ⅳ層形成以降の別時期の建物址となることも考慮される。

ピット

調査区南端及び北東部で検出された。径18~30cm前後、深さ8~30cm、径60~66cm・深さ21~27cmを測るものがみられる。配列は不規則で、掘立柱建物址等を構成する遺構は所在しない。全体的には、調査区南端及び中央部東に集中し、第Ⅳ層又は明茶褐色粘土を掘削して形成されている。埋土は茶褐色粘質土を主体とし、青磁・土師質土器片を含むピットも存在する。ピットの直径としては、平均24~30cmが多い。遺構の内容は不明確であるが、柵列等の一部であったことも考えられる。

その他の遺構

S D 2 東側に南北方向の石列が（検出長2.2m）、また調査区中央部で東西方向の石列（検出長1.3m）、調査区北東部に東西方向の石列（検出長0.6m）等が検出されている。これらの石列は、第Ⅳ・第Ⅲ層又は明茶褐色粘土上面で確認されたが、内容及び形成時期等については不明である。溝肩部又は段状地形の縁辺部に配されたと目されるが、部分的な検出で判然しない。S D 2 東側の石列は、S D 2 に平行する南北方向の地山整形ラインに沿うもので第Ⅳ層上に配石されており S D 2 形成期の遺構として把握されよう。



Fig. 3 検出遺構

3. 遺物

- (1) 土師質土器の杯・皿、瓦質土器の鍋、国内産陶磁器・輸入陶磁器の青磁等・土鍤が出土している。土師質土器は、杯・皿類が主流であるが、すべてロクロによる成形で、底部も回転糸切りが施される。口径と底径の差があまり認められないものが多く存在する。瓦質土器は鍋類であり、口縁部が直立するもの、やや外反するものがほとんどである。その他国内産陶器は近世の備前製が認められるが、中世のものとしては常滑産と考えられるものがある。
- (2) 土器類は概ね15~16世紀に属するものであるが、瓦質土器の鍋は15世紀代の遺跡で認められるもので、15世紀代のものが主流と考えられる。なお、輸入陶磁器のなかに青磁の蓮弁文のものがあり(42)、13~14世紀代の所産とみられる。



(註) この図は、「第1表 土師質土器法量表」『岡豊城跡発掘調査概報』
1988 高知県教育委員会 を基に作成した

土師質土器法量表

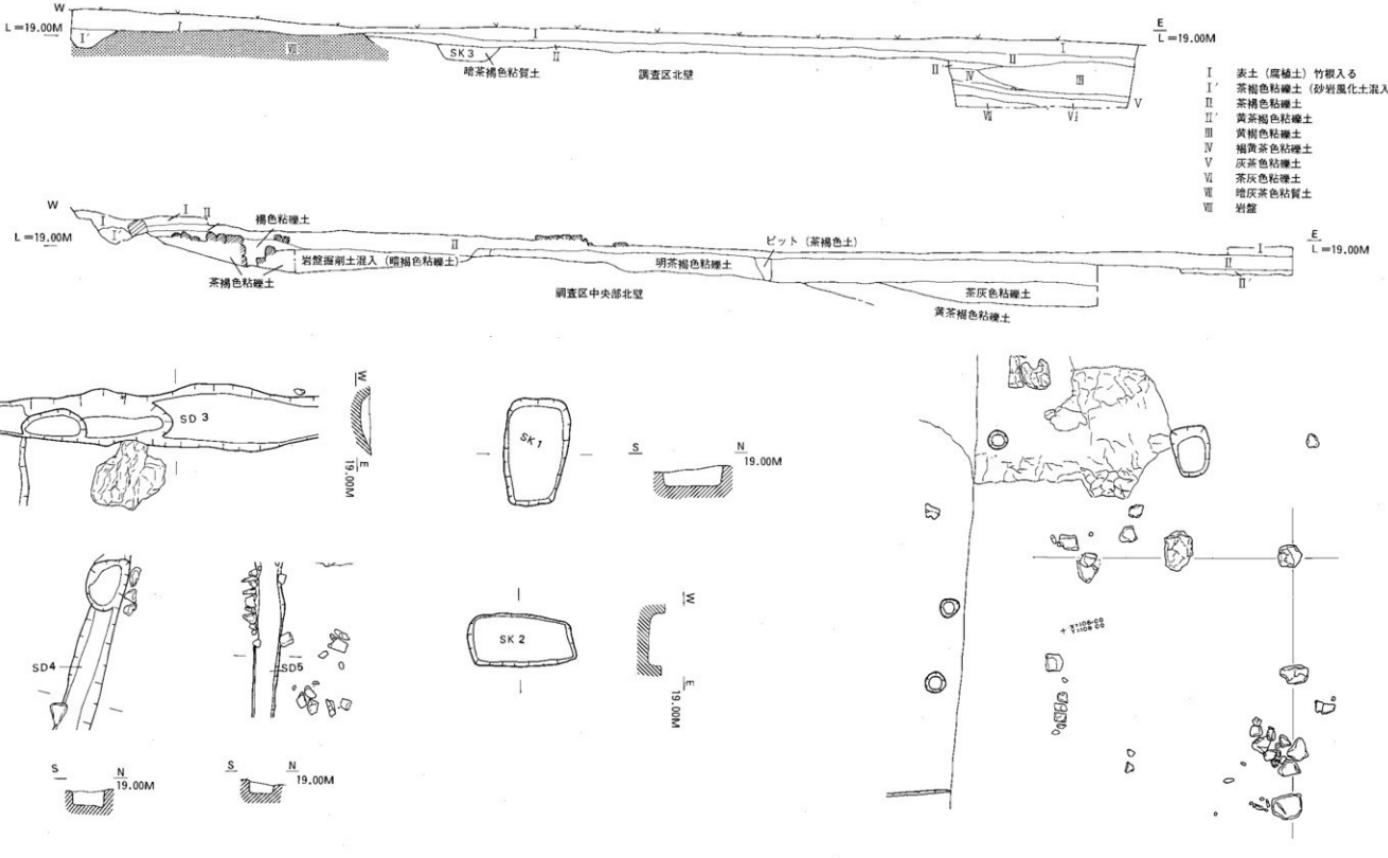


Fig. 4 土層及び遺構断面図

2 遺物

土師質土器 (Fig 5・1~26)

皿 (1~4), 杯 (5~26) が出土した。皿はロクロ形成によるもので、底部はすべて回転糸切り痕を残す。色調は黄橙色を呈する。胎土は精良な粘土を使用する。1・2はSD2の埋土中から出土した。杯は法量・器形により2・3類に区分可能で、直線的に体部が外反するもの (5・6), 口縁端部をさらに外反さるもの (7・8), 体部下半部から外上方へ外反さるもの (9・10) 等が認められるが、全体的に底径が広く器高も高い。杯は底部がすべて回転糸切り痕を残し、ロクロ形成によるものである。岡豊城跡詰部等出土の土師質土器と比較して、底部・器高に差違が認められることから、所属時期が異なることが考えられる。なお、杯類の形態については、体部の外反度が若干違うものの、芳原城跡出土土師質土器との類似性が認められる。6はSD5の埋土中から出土した他は、包含層からの出土遺物である。

輸入陶磁器 (Fig 7・42, 43)

42は青磁碗片で、蓮弁をもち、蓮弁の幅も広い。43は皿底部片である。また、44は白磁の底部片である。45・46は染付で、皿口縁部及び体部片である。青磁・白磁・染付の出土量は極めて少なく、また細片が多かった。ピットの一部から青磁細片が出土したが、その他は包含層中から出土している。

国内産陶磁器 (Fig 6・32~36)

常滑焼壺 (36)・備前焼鑄鉢、壺、甕、近世陶磁器等が出土している。中世に属する陶器類は出土点数は少なく、近世が大半である。特にSK1~3からの出土量が多い。

瓦質土器 (Fig 6・27~31)

鍋類を主体とする。口縁部の形態としては、直立するもの (27), 外反するもの (31), 端部が丸味を帯びるもの等がみられる。

その他の遺物 (Fig 6, 7・37~41, 48, 49)

渡来銭として祥符通宝 (北宋、初寿AD1008) が包含層中より出土している (48)。また、中世の遺物では土鍾 (39~41) が調査区中央部の礎石列周辺部から出土した。49は寛永通宝である。

調査区北西隅で、第Ⅴ層 (岩盤) 上に堆積する褐色粘土中から弥生土器 (37・38) が出土した。甕口縁部及び底部片で、口縁部には凹線文が施されている。弥生中期後半~末に属し、龍河洞式土器併行である。岡豊城跡の第一次調査では、詰から (A区南西部) 弥生中期後半~末の土器片が出土しており、高地性集落の存在が指摘されている。関連資料として注目される。

(参考) 森田尚宏、松田直則編『岡豊城跡発掘調査概報—第1~3次調査概要報告書—』

1988 高知県教育委員会

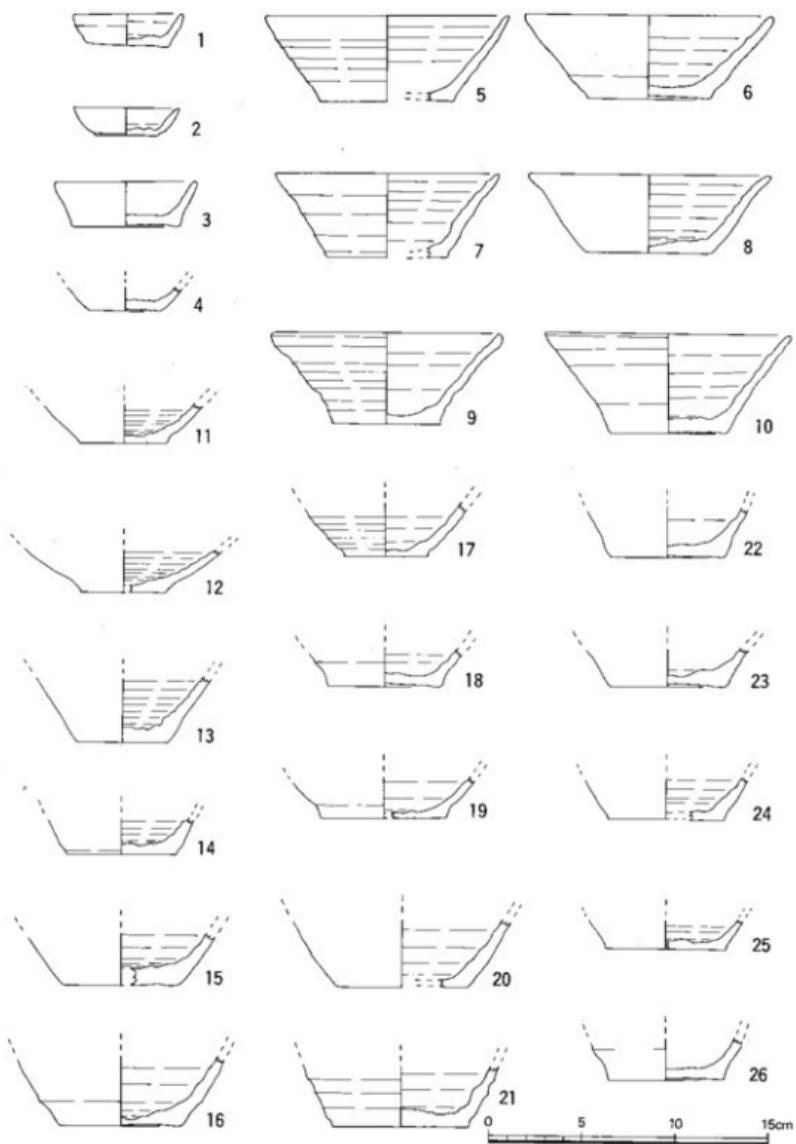


Fig. 5 出土遺物実測図

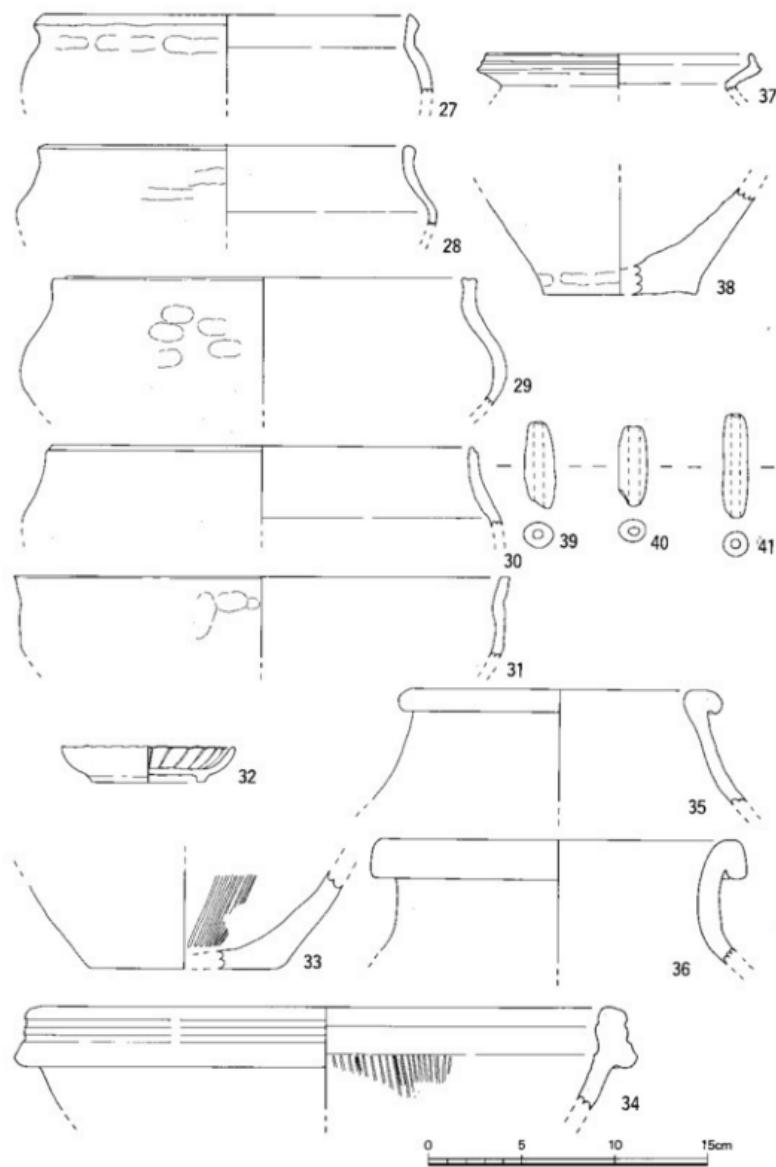


Fig. 6 出土遺物実測図

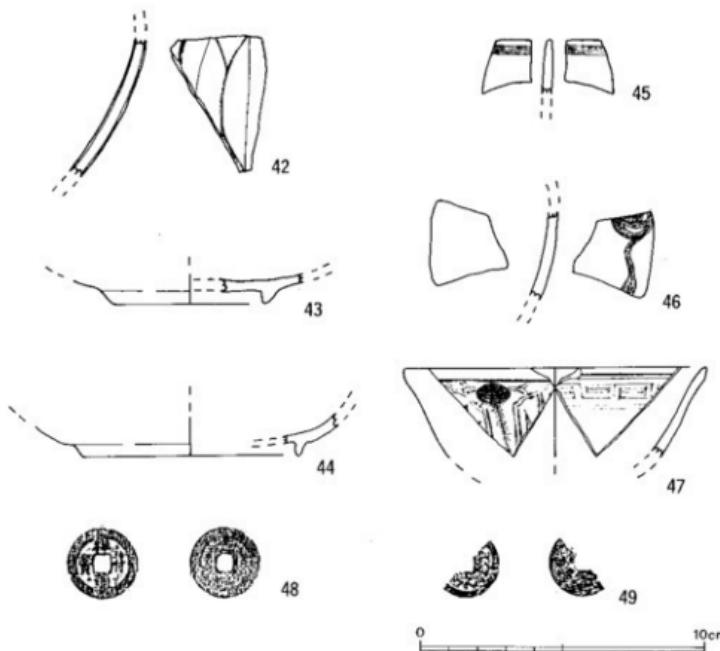


Fig. 7 出土遺物実測図

V ま と め

南国市阿豊町字西谷に所在する西谷遺跡を対象とした今回の発掘調査では、溝・土塙・礎石・ピット・石列等を検出し、戦国時代～近世の土器類及び瓦片・土鍤・古銭等が出土して、岡豊城跡関連遺構が存在したことが明らかとなった。調査で得られた所見及び今後の問題点についてまとめてみたい。

1. 調査

- (1) 調査対象地は、岡豊城跡の所在する岡豊山の東側山裾にあたる谷奥部で、約440m²を調査した。調査地は、匁字型に丘陵斜面部を整形した標高19m前後のテラス状の平坦地で、調査地南西及び北西は丘陵中位からの小さな谷部である。
- (2) 調査地は岡豊城跡の隣接地であり、また、長宗我部氏屋敷跡とも伝えられる土地であることから、遺構等の所在が想定されていた。調査では、岡豊城跡存続期に遺構形成が行われていたことが明らかとなり、同城跡に関連した施設の存在を確認した。
- (3) 調査地の谷部は、国道32号線からの進入路が建設されるまでは、岡豊山上に至る主要な登車路として利用されていた。岡豊城跡への通路としては、この谷部から岡豊山丘陵南斜面を経て詰西側下段部に至る経路が推定されており、岡豊城跡存続期における城入口部として機能した可能性をもつている。谷奥部からの遺構等の確認は、調査地が岡豊城跡のなかで城跡を構成する主要空間の一画として活用されていたことを物語り、岡豊城跡への進入路を考えるうえでも今後検討される場所となろう。なお、調査地東側の谷入口部では、畠地等から中世土器片が採集されており、調査地と関連した屋敷地としての利用も推察される。

2. 検出遺構と出土遺物

- (1) 調査区西端の山裾からSD 1・2が、調査区北東部でSK 1～3が検出された他、SD 3～5・礎石列・ピット・石列等が検出された。
- (2) 検出遺構のなかで、SD 2は埋土中・溝底面上及びSD 2下部の整地土(暗褐色粘土)から戦国時代に属する土師質土器片が出土し、遺物の所属時期に形成された遺構であることが確認された。また、SD 1については、出土遺物は少なかったもののSD 2とほぼ同時期に形成された遺構と判断される。なお、SD 1の如く岩盤掘削による溝の形成は、岡豊城跡詰部の調査でも確認されており、SD 1との類似性が指摘される。
- (3) SD 3～5のなかには、埋土中から青磁・土師質土器を出土するものがあり、SD 1・2との先後関係は不明ながら、戦国時代の遺構である可能性を有する。また、ピットの一部からも、青磁・土師質土器が出土しており、戦国時代の遺構として把えることが可能である。
- (4) 級石列の所在から、礎石建物址が所在していたことは明白である。しかし、その形成時

期については戦国時代～近世後半の要素を含み、特定することは難しい。造構埋土であるⅠ～Ⅱ・Ⅱ'層からは、中世の土器片と共に近世陶磁器類が出土している。礎石が置かれた基盤土は第Ⅲ層又は第Ⅳ層（岩盤）である。第Ⅳ層上の礎石列からはSD1・2との関連がうかがわれるが、可能性にとどまる。また第Ⅲ層上の礎石列については、第Ⅳ層中等から土師質土器片が出土しており、SK1～3の存在からも近世以降の形成である疑いがもたれる。礎石列で復元される建物址の明確な先後関係、帰属時期が不明な状況であり、その性格及び形成時期の決定には慎重を期す必要があろう。

- (5) SK1～3は、近世以降に形成された土塙で、耕作用の野蓋又は野溜として利用されたと判断される。埋土中から近現代陶磁器片・瓦片等が出土しており、調査地の最近までの土地利用の状態を示す。

礎石列の周辺の石列については、溝肩等の一部であるとみられるが、その所属時期・内容等については不明である。

- (6) 検出遺構の形成状況を復元すれば、以下のとおりである。

- ① 谷奥部の山揮部を削平して東側に造成する。露出した岩盤部は掘削して除去し、窪地は排土等で埋め、平坦化する（第Ⅲ・Ⅳ層・明茶褐色粘礫土及び暗褐色粘礫土）。整地後、山際部に溝等の排水施設を設ける。SD2埋土等及び暗褐色粘礫土出土土器から、15C後半～16C前半には整地作業が行われたことが考えられる。
- ② 平坦部に柵列もしくは簡素な掘立柱建物を設ける（ピットの一部。掘立柱建物は推定）。また、溝・礎石建物を設けたことも推測される。SD3～5埋土中及び礎石周辺第Ⅳ層上出土土器から、造構存続期は15C後半～16C末と考えられる。
- ③ 17C代には戦国時代に形成された造構は廃絶している。SK1～3埋土中出土遺物・第Ⅰ・Ⅱ層中出土遺物から18C後半以降には煙地等として転用されたことが考えられる。なお、SK1～3及び第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物中には近世の瓦片（丸瓦・平瓦）がみられ、SD1南部の石組溝・石列等の所在から屋敷地であったことも考慮される。

- (7) 今回の調査で、岡豊山東側の山際谷奥部で岡豊城跡存続期の造構が検出されたことは、岡豊城跡全体の造構配置を探るうえで意義深い。検出遺構の内容からは、調査地が岡豊城跡の郭の一部であった可能性が強い。造構の詳細は明瞭ではないが、排水溝・ピット・礎石列・石列等が形成されていることから、建物を伴う郭として利用されたことがうかがわれる。調査地は、岡豊城跡への通城口であるとみなされている場所でもあり、戦略的な配慮から城門・見張台・砲・倉庫等の施設が建設されていた可能性がもたれる。

長宗我部氏屋敷跡の所在に関しては、存在を明確にする遺構等は検出されなかった。但し、調査地東側の谷入口部からは中世土器等が表面採集されており、屋敷地としての検討素材が残されている。今後の調査によって、谷奥部の検出遺構と共に再検討されることが期待される。

図面・図版



調査地遠景（矢印調査地・右手は岡豊山・北東から）



調査地遠景（手前谷入口部・奥調査地・東から）



調査前近景（北東から）



同上（東から）



伐採風景（南から）



同上



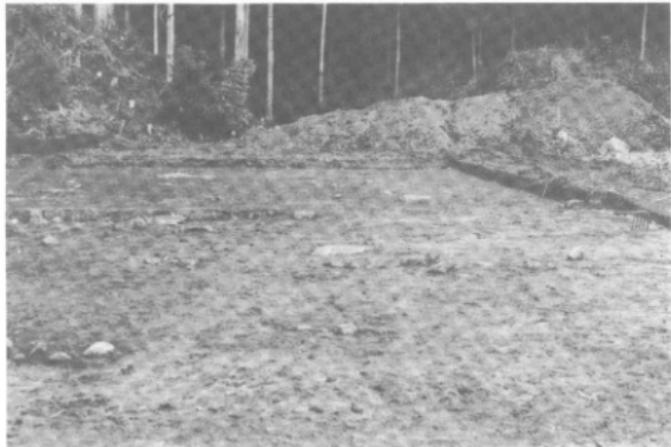
トレンチ設定状況（南から）



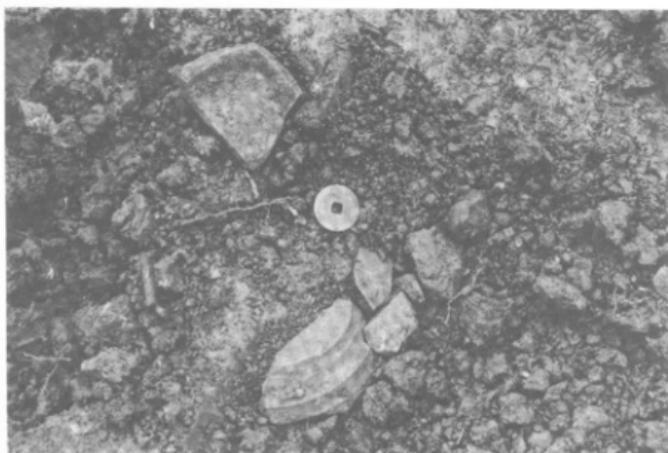
同 上



S D 1・2 検出状態（北から）



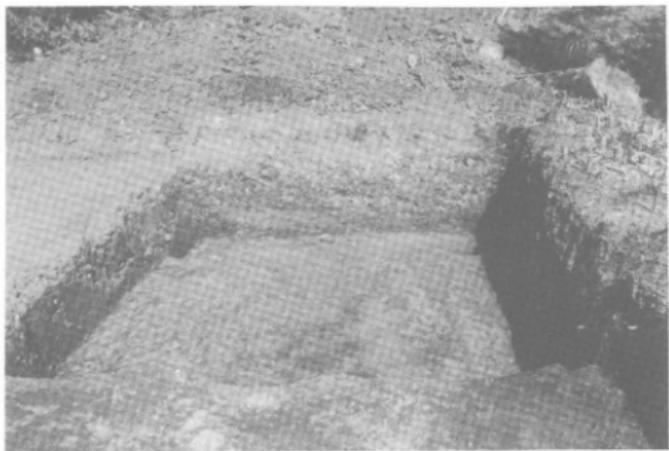
礫石検出状態（南から）



古銭（祥符通宝）出土状態（北から）



S D 2 遺物出土状態（北から）



調査区北東部トレンチ完掘状態（南から）



S D 1 + 2 周辺（南から）



調査区北東部造構検出状態（北東から）



S D 4・5, S K 1～3周辺（南西から）



S D 1 ~ 5 周辺 (南から)



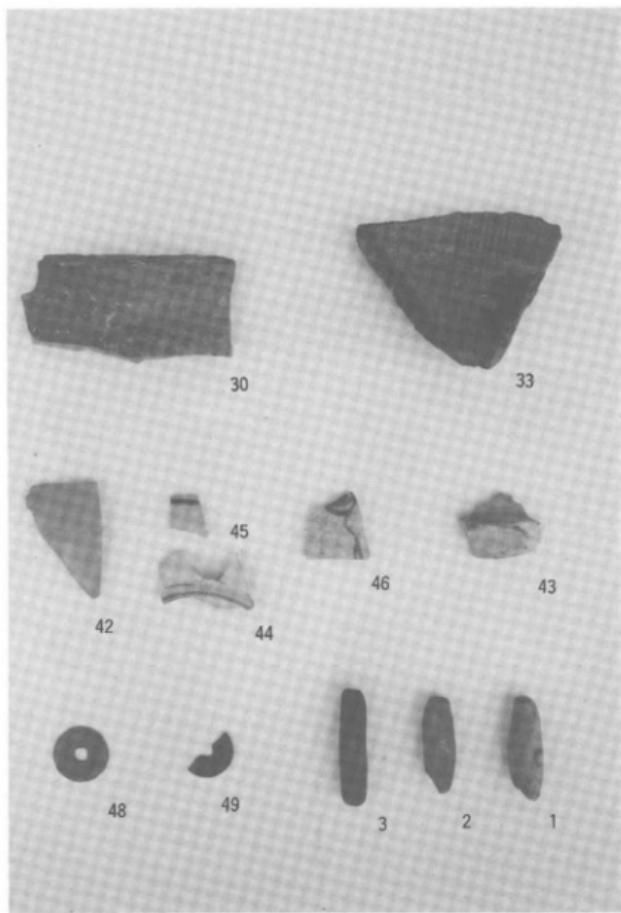
S D 2 南側礎石検出状態 (南から)



調査区東側遺構検出状態（南西から）



調査区遺構検出状態（北から）



出土遺物（青磁・染付・瓦質土器・古錢・土錘）



出土遺物（土器質土器）

西谷遺跡発掘調査報告書

——伝長宗我部氏聖教跡の調査——

平成3年3月31日

編集・発行 南国市教育委員会

印 刷 平和プリント